

明星大学「SDGs ポイント」の活用と成果

The Utilization and Results in the “SDGs Points”

Program of MEISEI University

安岡 寛道

Hiromichi Yasuoka

要旨

昨今の日本において、“SDGs 経営”を標榜する企業や団体はかなり増加したが、個々人の意識まで本質的に理解しているとは言い難かった。そこで、明星大学では、「SDGs に関するポイントプログラム (SDGs ポイント)」の提供を通じ、未来を担う学生個人が SDGs の重要性を楽しみながら体験して本質的な理解を促進する共に、大学としてこれらの取り組みを社会に訴求する活動を 2021 年 9 月 1 日に開始した。これを約 3 年間実施し、2024 年 1 月末に終了した。(その後の学内報告や上位者表彰も終えた。)

「SDGs ポイント」は、これまでにあったエコポイントやマイナポイントなどのように、本来の目的を達成するための学生向けのインセンティブとして導入したものであった。この「SDGs ポイント」の活用 (実態) と成果 (実績) を概観しながら、全体を分析・考察する。

企業や大学の“SDGs 経営”の本質は個人の行動や意識という点を強調した取り組みであり、「SDGs ポイント」は、最終的には日本社会やさらに地球環境に貢献するように始めたものであったが、その貢献がどのようなものであったかも論じておきたい。

[キーワード] SDGs、ポイントプログラム、ICT、明星大学、社会貢献

1. 背景と目的 (戦略)

1.1. SDGs における目標と問題

SDGs (Sustainable Development Goals : 持続可能な開発目標) (図表 1) は、2015 年 9 月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択され、2030 年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標である。この SDGs は、17 のゴール・169 のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない (leave no one behind)」ことを誓い、発展途上国のみならず、先進国が取り組む普遍的なものである。日本においても、政府や企業を始めとして、積極的に取り組もうとしている[1][2][3]。

そのため、日本の未来を背負う大学生においても、本質的な内容に関する認識レベルを上げ、貢献していくことが迫られているが、その内容を本質的に理解している学生は極めて少なかった。これらは、大学教育においても、由々しき問題でもあった。

また、昨今は“SDGs 経営”を標榜する企業や団体もかなり増加したが、その構成員である

ュートラル化（二酸化炭素の放出と吸収が相殺されている状態）にし、従業員のエコ推進活動などを掲げている場合が多かった。しかしながら、個々人の取り組み、その意識まで踏み込まなければ、活動のマンネリ化によって、持続していくことはできないとも言えた。

図表 1：SDGs の 17 のゴール（目標）



出所) 外務省ホームページ

1.2. “SDGs 経営” が求められていること

SDGs は、これまで謳われてきた ESG（環境（Environment）・社会（Social）・ガバナンス（Governance）、詳しくは多くの他文献参照）の延長線上で、その保全という目的ももちろんある。しかしながら、ただそれだけでなく、他に以下の目的が大きく存在する。

- ① SDGs が大きなビジネスチャンスになりうる
- ② 企業や個人のコミュニケーションツールになる
- ③ ステークホルダーからの信頼を獲得する

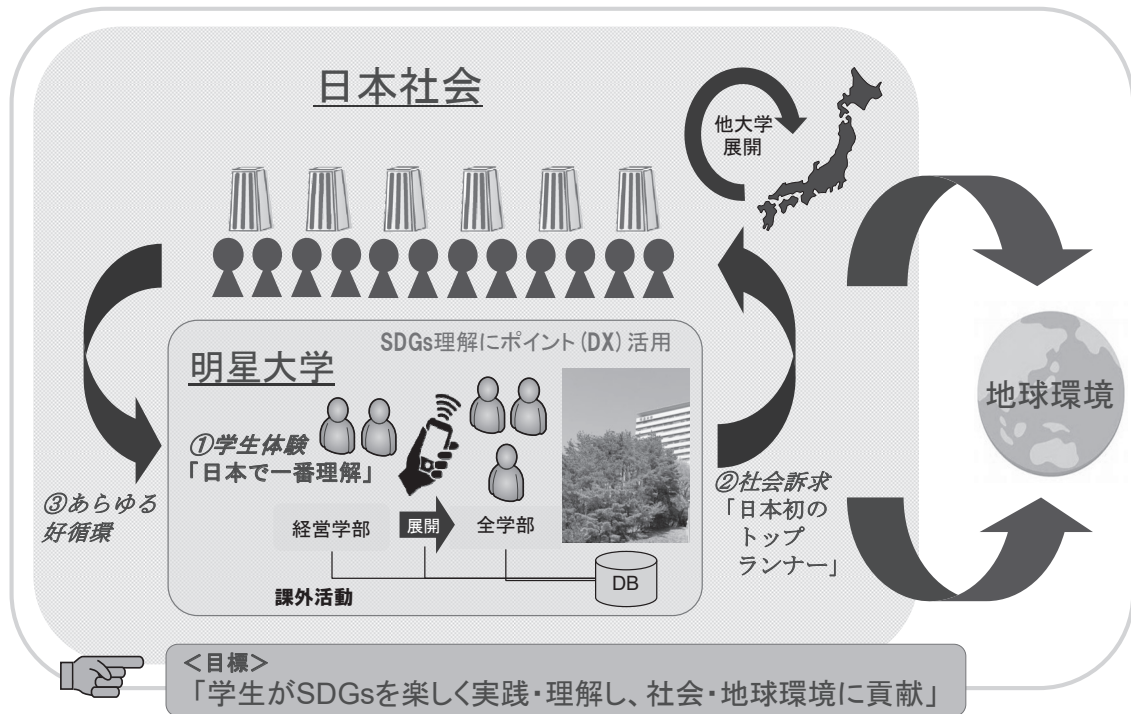
以上における①において、SDGs 達成に向けて 2030 年までに世界で「年間 12 兆ドルの経済価値が生まれる」と予測・発表されている[4]。これは企業からその集団の産業、社会としての経済効果のみならず、地方経済の活性化にもつながることであり、SDGs の推進には、単なるボランティア的要素だけでなく、そういった打算的な考えももちろん存在する。

1.3. 「SDGs ポイント」における戦略

これらの背景に基づき、明星大学（東京都日野市）では、まずは経営学部から、約半年後には全学部において、SDGs の重要性、内容の本質な理解および実践を行うため、「SDGs に関するポイントプログラム（以降、SDGs ポイント）」を2021年9月から開始した。

「SDGs ポイント」は、希望する学生がICT（スマホなど）を活用し、ポイント収集を楽しみながら、SDGs の自発的な学習を行い、“SDGs 分野を日本で一番理解した学生”になっただけ狙いがあった。また、「SDGs ポイント」は、これらの構想や経過を社会に情報発信し、出来るだけ訴求することにより、明星大学が“SDGs 分野で日本のトップランナーの大学である”という認知を広め、日本社会から地球環境への貢献を目指した。さらに、これらの状況から、大学としてもあらゆる方向に好循環をもたらすことも目指した（図表2）。

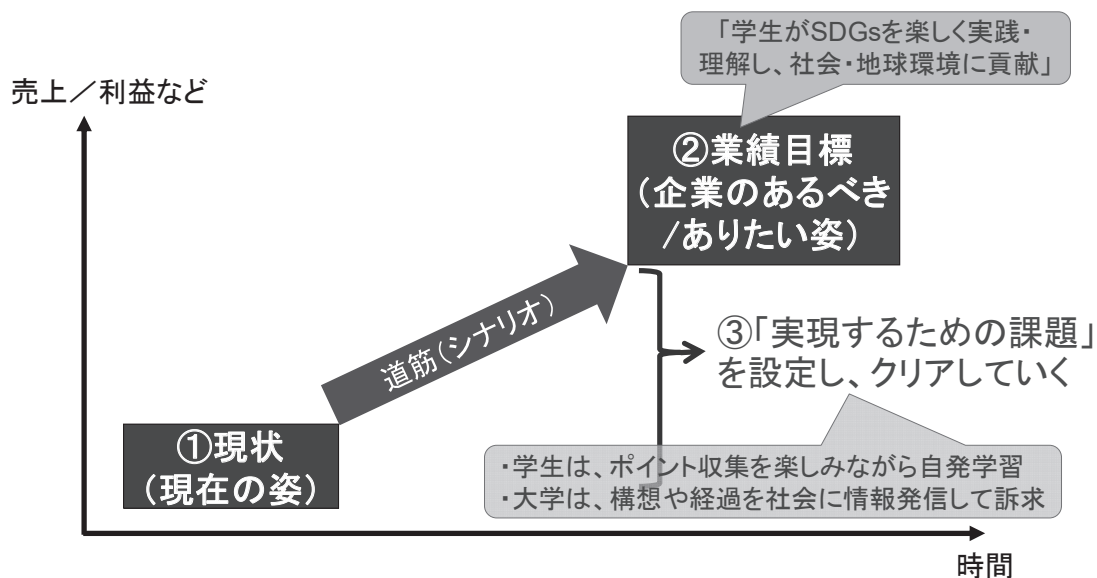
図表2：「SDGs ポイント」の全体像



なお、経営戦略とは、企業を経営する環境において、企業の目的・目標を達成するために必要となる将来の道筋（シナリオ）を示した長期的な構想であり、これを明星大学という企業に当てはめ、「SDGs ポイント」の戦略として図示すると、図表3のようになる。

目標は、図表2にも記載した通りであるが、そのための将来の道筋（シナリオ）のプランニングが必要であり、学生や大学の両者が諸々の手順（内容）を踏んでいく中期的な構想であった。後にも示すが、その道筋・手順を地道に歩み、約3年間の歳月において、継続的に続ける何人かの学生、取材などによる情報発信を行ってきた大学（主に責任教員の著者）において、その構想を真っ当してきた。

図表3：「SDGsポイント」の戦略



2. 3年間の変遷と意義

2021年9月1日から、明星大学経営学部の100名程度の登録された参加学生から開始され、年度跨ぎの間は各々一時的に休止したが、2024年1月末日まで、延べ3年間に渡り、実施された。これらの変遷を簡単に振り返っておく。

2.1. 開始前の概要

2021年7月20日に、“2021年度「明星大学教育新構想」事業”として、同年5月14日に提出していた事業申請書が採択され、実施が決まった。なお、著者がこの事業への申請を行うことを促したのは、当時の経営学部長であった若木宏一教授であった。

その後、概要設計～要件定義を行い、参加学生を募り、9月1日に開始された。なお、それから年末までの概要（内容、類似事例含む）は、文献[1]に既に投稿されている。但し、文献[1]は、主に2021年末までの内容である。

なお、その開始前までに、明星大学でSDGsに関する取り組みの情報発信は、図表4のように5件程度であった。

図表 4：2021 年 9 月までの明星大学の SDGs 関連の情報発信

<p>■人文学部</p> <p>①2018. 03. 15 明星大学研究紀要—人文学部 第 54 号 (毛利 聡子) SDGs 目標 6 をめぐるジレンマ —「水と衛生は人権」に向けた市民社会の挑戦と課題</p>	
<p>■理工学部</p> <p>①2021. 03. 24 明星大学理工学部研究紀要 第 57 号 (和田薫) 理科教育に組み入れた環境教育（生物多様性認識）の実践 —カリキュラム・マネジメントに基づく博物館やビジターセンターと連携した体験学習</p> <p>②2021. 04. 22 理工学部 日野市中央公民館主催「ひの市民大学」に講座を提供 https://www.meisei-u.ac.jp/2021/2021042201.html</p> <p>③2021. 08. 31. 明星大学教職センター年報 (和田薫 他) サメの歯化石を用いて人と海の関係を学ぶ理科の観察実習の開発と実践：海洋教育パイ オニアスクールプログラムで開発した新学習指導要領対応の SDGs への発展学習</p>	
<p>■教育学部</p> <p>①2021. 04. 02 明星大学×明治大学×屋久島おおぞら高等学校 連携でカードゲームを開発しました https://www.meisei-u.ac.jp/2021/2021040201.html</p>	

出所) 明星大学ホームページ（新着情報など）から抜粋

2.2. 2021 年度～2023 年度までの概要

2021 年 9 月から 2022 年 3 月は、既述の通り、「明星大学教育新構想」事業”として実施した。その後、大学ならではの単年度予算のため、継続が危ぶまれたが、理工学部の柳川亜季准教授が率先する“明星 SATOYAMA プロジェクト”（旧称：みどりのキャンパスプロジェクト）に相乗りし、2022 年 6 月から 2023 年 2 月、2023 年 5 月から 2024 年 1 月まで実施した。

これらを概観すると、図表 5 のようになる。初年度（2021 年度）に関しては、既述の通り、文献[1]に多くを記載している。

図表5：2021年度～2023年度の「SDGsポイント」の概要

項目	2021年度	2022年度	2023年度
実施期間	21年9月1日～22年3月21日	22年6月1日～23年2月28日	23年5月1日～24年1月31日
評価頻度	1週間単位で集計 ⇒1ヶ月単位で表彰 (表彰者は全て経営学部生)	1ヶ月単位で集計 ⇒3ヶ月単位で表彰 (表彰者に理工学部生も有)	同左
登録者	149名(3月21日時点)	161名(2月28日時点)	156名(1月31日時点)
登録学部	・経営学部 (1月途中から他学部も参加可、以降同様)	・経営学部 ・理工学部 ・人文学部	・経営学部 ・理工学部 ・人文学部
投稿件数	351件 (授業課題の投稿68件含む)	45件 (月換算180件)	34件 (月換算136件)
予算元	明星大学教育新構想事業 (萌芽)	明星SATOYAMAプロジェクト	同左
特記事項	・脱炭素チャレンジカップ(※) マクドナルドオーディエンス賞(視聴者1位) ・情報文化学会大賞 ・経営学紀要掲載	・※再応募→落選 ・学会・セミナーで発表	・ジャパンSDGsアワード (外務省等)応募→落選 ・問合せや取材が数件有り ・著書の一部に掲載 ・経営学紀要掲載(本橋)

また、その間において、目的意識と危機意識の比較分析について、学会にて発表[2]しており、簡潔にまとめておくと、図表6のようになる。なお、これらについて、文献[3]の1節において、地方創生における21事例のうちの1事例としても取り上げている。

図表6：目的意識（任意での投稿）と危機意識（授業課題での投稿）の比較

- 任意での目的意識のみの投稿件数は、255件が18週間弱（2021年度）に渡って投稿された。
1週間平均とすると、14.3件であった。
投稿率（人数比）は、平均128人（9/1：107名～1/2：149名）で、22.3%（2週間平均）であった。
- 授業課題での危機意識を取り入れた投稿件数は、131件（「SDGsポイント」参加学生68件＋未参加学生63件、後者は図表5に含まず）が2週間（2021年度）で投稿された。
1週間平均とすると、65.5件であった。
投稿率（人数比）は、全138人中131人投稿で、94.9%（2週間平均）であった。

つまり、SDGs は自発的な行為だけで進めるべきと暗黙に思われているが、個人の意識差は大きく、場合によっては、“危機意識”を取り入れるべきである。言い換えると、ある程度の強制は必要である。

2.3. 2021 年度の実績

初年度（2021 年度）に関しては、文献[1]に多くを記載しているが、数値的には 2021 年末までであったため、その後の年度末までの数値も含めてまとめておく（図表 7）。

初年度ということもあり、かつ週単位（月曜日～日曜日）で投稿の評価（ポイント付与）を行っていたため、合計で 351 件の投稿があった。これでも特定の学生の連続した投稿が多く、「SDGs ポイント」の仕組みに登録している学生（参加学生）が全て投稿している訳ではない。図表 7 のような集計（1 ヶ月）単位で、上位者（★）を 6 回表彰した。

なお、9 月の開始直前の大学における情報発信では、「明星大学経営学部の課外活動に「SDGs ポイント」を導入します～ ポイントプログラムを活用して自発的な SDGs 学習を促進～」として発表している。

（大学における発表：<https://www.meisei-u.ac.jp/2021/20210827p1.html>）

図表 7：2021 年度の「SDGs ポイント」での投稿数（＝付与ポイント数）

SDGs 目標	9月度 (9/1-10/3)	10月度 (10/4-10/31)	11月度 (11/1-12/5)	12月度 (12/6-1/2)	1月度 (1/3-2/6)	2-3月度 (2/7-3/20)
1	0	0	0	0	1	1
2	7	8	1	0	4	0
3	7	10	7	4	3	3
4	6	6	5	0	1	4
5	0	3	0	0	2	0
6	3	4	1	0	2	0
7	12	10	8	4	6	2
8	2	4	2	0	0	0
9	2	0	0	0	0	0
10	1	1	0	0	0	0
11	10	8	6	0	7	1
12	16	13	14	4	29	2
13	6	9	5	2	9	0
14	4	12	5	1	15	0
15	4	5	1	0	4	0
16	2	2	0	1	0	0
17	2	3	0	2	0	0
合計	84	98	55	18	83	13

注) 1 月度に関しては、授業（長谷川岳雄特任教授の「キャリア開発」）の課題にて投稿した 68 件を含む。

（但し、「SDGs ポイント」の未参加（未登録）の学生が投稿した 63 件は含んでいない。）

生および大学においても誇らしい限りである。(①は、視聴者投票2位までが受賞で、1位)

- ① 「脱炭素チャレンジカップ2022」(2022年2月15日)における「マクドナルドオーディエンス賞」で、視聴者投票1位

(脱炭素チャレンジカップ：<https://www.zenkoku-net.org/datsutanso/>)

(大学における発表：<https://www.meisei-u.ac.jp/2022/20220225p1.html>)

- ② 「情報文化学会」(2021年10月30日)における「大賞」

(情報文化学会：<http://johou-bunka.jp/>)

2.4. 2022年度の実績

2022年度に関しては、“明星 SATOYAMA プロジェクト”での実施となった。予算自体は縮小され、かつ毎週評価するのは1つの授業科目同様の負荷があったため、他の学務との調整もあり、月単位(1日～末日)での運用にかえた。その結果、〆切の催促も週でなく、月となったため、投稿数は〆切の頻度に応じて減少したと言って良いだろう(図表8)。難しいところではあるが、2年目ということもあり、取り組みの目新しさもなくなり、その頻度以上に減少した。図表5には、月4週とすると、〆切4回の催促があるため、その換算値(要するに4倍の数値)も入れたが、この比較を見ると、約半分に減少したのが分かる。

なお、2022年度は、合計で45件の投稿があった。2021年度以上に特定の学生の連続した投稿が多く、同様に「SDGsポイント」の仕組みに登録している学生(参加学生)が全て投稿している訳ではない。図表8のような集計(3ヶ月)単位で、上位者(★)を3回表彰した。

図表8：2022年度の「SDGsポイント」での投稿数(=付与ポイント数)

SDGs 目標	6-8月	9-11月	12-2月
1	1	0	0
2	0	0	0
3	0	0	1
4	0	0	1
5	0	0	0
6	0	0	0
7	2	3	6
8	0	0	0
9	0	0	0
10	0	0	0
11	0	1	1
12	3	11	4
13	1	0	0
14	2	4	1
15	0	1	2
16	0	0	0
17	0	0	0
合計	9	20	16

2022年度は、SDGsの取り組みを投稿してもらい、それを評価してポイント付与する通常の取り組み以外にも、いくつかの取り組みを実施した。まず、2021年度の結果であったが、文献[2]で学会発表を行った。また、発刊自体は2023年度となったが、その大部分を2022年度に執筆した書籍としての文献[3]をまとめた。

他に、2021年度の開始時点から支援に加わった、事務局の2学生（当時の経営学部4年・安岡ゼミの西村爽、今井詩央里；後述の図表13左側の中と右）も参加し、星友祭の一日（10月30日）において、一般の来場者（子供含む）に対して「SDGs クイズ」を実施し、明星大学のSDGsの取り組み、推進内容をアピールした。

さらに、2022年末のオープンキャンパス（12月26日）では、事務局学生の西村爽が、就活でのアドバイスの他に、「SDGs ポイント」に関するプレゼンテーションを行い、本取り組み自体を紹介した。また、同じく今井詩央里は、「SDGs ポイント」での経験も踏まえ、卒業研究論文[5]を執筆し、年度末に完成させている。

その他、2021年度の予算をもとに開発し、2022年度の予算で継続する運用費を捻出し、2022年3月～9月（および一部年末まで）にかけて、スマホのアプリを導入した。その際、株式会社野村総合研究所（未来創発センター）、株式会社ベストプランニングの協力を仰いだ。

なお、アプリの中身まで開発した訳ではなく、ユーザーインターフェース（UI）部分のみを、既存のクラウドサービスを活用して導入した。スマホに表示されるアプリは、図表9の通りである。

図表9：「SDGs ポイント」のアプリのインターフェース



スマホ・アプリの仕様には、iPhone（iOS）とAndroid（左記以外）が有り、Android版はGoogle Play Store、iPhone版はApple Storeに各々承認された公式アプリが掲載されている。明星大学「SDGs ポイント」のAndroid版のアプリは、Google Play Storeで承認され、公式アプリとなり、以下のサイト（URL）にてダウンロードができた。なお、そこから授業のコンテンツ掲示（オンライン授業含む）やレポート課題の提出などで使う、「明星LMS」の登録のある全コース（授業コース）に移動が可能であった。

<https://play.google.com/store/apps/details?id=jp.global.ebookset.app1.best5678>

また、明星大学「SDGs ポイント」のiPhone版のアプリは、Apple StoreがGoogle Play Storeよりも厳しくて未承認であったが、そのアプリ（通称、野良アプリ）もでき、以下のサイト

にてダウンロードができた。なお、こちらも「明星 LMS」の登録のある全コース（授業コース）に移動が可能であった。

<https://adminhb.appl.jp/ipadownload/best5678/best5678.html>

しかしながら、アプリ（UI 部分だけ）を安価に導入したが、「SDGs ポイント」を始めとして、常に使用するようなものでないと、利用頻度は高くないことが分かり、約半年後には運用費削減のため、アプリの運用を終了した。これらは、ICT、DX 活用の難しいところでもあるが、世の中に出回るスマホ・アプリの課題も見えた。

2.5. 2023 年度の実績

2023 年度に関しては、引き続き“明星 SATOYAMA プロジェクト”で実施され、月単位（1日～末日）であった（図表 10）。

2023 年度は、合計で 34 件の投稿があった。2022 年度と同様に特定の学生の連続した投稿が多く、これまでと同様に「SDGs ポイント」の仕組みに登録している学生（参加学生）が全て投稿している訳ではない。図表 10 のような集計（3 ヶ月）単位で、上位者（★）を 3 回表彰した。

図表 10：2023 年度の「SDGs ポイント」での投稿数（＝付与ポイント数）

SDGs 目標	5-7月	8-10月	11-1月
1	2	0	0
2	1	2	2
3	0	0	0
4	0	0	0
5	0	0	0
6	0	0	1
7	1	1	0
8	0	0	0
9	0	0	0
10	0	0	0
11	1	1	1
12	7	8	5
13	0	0	0
14	0	0	0
15	0	1	0
16	0	0	0
17	0	0	0
合計	12	13	9

24 2023 年度も、通常の取り組み以外にも、いくつかの取り組みを実施した。

まず、創価女子短期大学（創価女子短大）が来校し、意見交換を行った。これは、明星大

学の「SDGs ポイント」を参考にしたいと、2023年4月に打診があり、創価女子短大の青野健作准教授（財務省出身、教員4年目で著者と同様、図表11の左）と学生3名（図表11の左から2～4番目）が9月6日に来校された。そこでは、2023年度の最初から支援に加わった、2代目の事務局2学生（安岡ゼミ3年生：永菌明音、高橋乃愛、図表11の右から1～2番目）と共に、その説明と意見交換を行い、ついでに校内の探索を行った。図表11は、その時の様子である。その後、創価女子短大では、「SDGs ポイント」をInstagramを活用して、2023年10月～12月まで3ヶ月間開催し、2024年も開催を予定している。

図表 11：創価女子短大の来校時の意見交換の様子



他にも、Instagramを2023年6月に開設した（図表12）。特に2023年度から事務局学生となった前述の2名（永菌、高橋；図表13右側の中と右）を中心に、以下のサイトで展開されている。

図表 12：「SDGs ポイント」のInstagramのロゴ



<https://www.instagram.com/meisei.sdgs/>

また、「SDGs ポイント」の取り組みが取材され、記事なども掲載された（図表 13）。この記事は、明星大学のホームページにも概要が掲載されている。

大学における発表：<https://www.meisei-u.ac.jp/2023/2023112402.html>

⇒ ① <https://www.yoridori.jp/earth-note/interview-meisei-u/>

大学における発表：<https://www.meisei-u.ac.jp/2023/2023112203.html>

⇒ ② <https://livika.jp/22298/>

図表 13：「SDGs ポイント」の記事掲載（①EARTH NOTE 編集部<左>、②LIVIKA<右>）の抜粋

明星大学のSDGsの一つは「SDGsポイント」で学生の取り組みを後押しすること

2023.10.20 (最終更新日2023.11.13)

[この記事のタイトルとURLをコピー](#)



——SDGsに取り組んだらポイントがもらえるというのは、面白い発想ですね。どのくらいの数の学生が参加しているのですか？

安岡さん 現在は経営学部を中心に150名ほどの学生が取り組んでおりますが、理工学部や情報学部など他の学部の学生も参加し、全学部の学生が参加できる仕組みになっています。基本的に運営は私のゼミ生が行い、SDGsの戦略を勉強しながら事務局も担当してもらっている形です。

もっと知りたい！

ESGとはEnvironment(環境)のE、Social(社会)のS、Governance(ガバナンス)のG それぞれの頭文字をとった言葉で、企業の持続可能性や社会的な責任を評価する際の、3つの主要な基準を指しています。

SDGsポイントはオンラインで行われ賞品ももらえる

LIVIKA



2023.11.10

SDGs 大学プロジェクト × Meisei Univ.

SDGs / 取材

SDGs施策の内容



2.6. 2021年度～2023年度の実績（SDGsの17の目標別）

2021年度～2023年度の合計430の投稿に関して、最後に17の目標別の割合をまとめておく（図表14）。

最も多かったのが、「12. つくる責任つかう責任」であった。学生の物の対するエコの意識の象徴とも言えるだろう。次に多かったのが、「7. エネルギーをみんなにそしてクリーンに」であった。これは、学生の省エネに対する意識であろう。3番目に多かったのが、「14. 海の豊かさを守ろう」であった。これは、学生のペットボトルなどのゴミに対する意識であろう。

26 以上のSDGsの取り組みの投稿が、全体の10%を超えるものであり、改めて認識できた結果であった。

図表 14：3年間の「SDGs ポイント」での17の目標別の投稿割合と代表的な投稿の抜粋

	1. 貧困を無くそう	1.2%	
	2. 飢餓をゼロに	5.8%	
	3. すべての人に健康と福祉を	8.1%	
	4. 質の高い教育をみんなに	5.3%	
	5. ジェンダー平等を実現しよう	1.2%	
	6. 安全な水とトイレを世界中に	2.6%	
2位	7. エネルギーをみんなにそしてクリーンに	12.8%	省エネに対する意識 ・シャワーなどでの節水 ・断熱効果を利用した節電 ・徒歩による節エネルギー (およびCO2排出の削減)
	8. 働きがいも経済成長も	1.9%	
	9. 産業と技術革新の基盤をつくろう	0.5%	
	10. 人や国の不平等をなくそう	0.5%	
	11. 住み続けられるまちづくりを	8.6%	
1位	12. つくる責任つかう責任	27.0%	物に対するエコの意識 ・エコバックの利用 ・エコ製品(洗剤など)の 購入とその継続的な使用 ・衣類の再利用(古着) ・フードロスの削減 ・ペーパーレス(デジタル /クラウド)化
	13. 気候変動に具体的な対策を	7.4%	
3位	14. 海の豊かさを守ろう	10.2%	ペットボトルなどのゴミに に対する意識 ・マイボトルの利用 ・海洋プラスチック問題へ 配慮でプラスチック削減
	15. 陸の豊かさを守ろう	4.2%	
	16. 平和と公正をすべての人に	1.2%	
	17. パートナリシップで目標を達成しよう	1.6%	

なお、この3年間の表彰(2021年度6回、2022年度3回、2023年度3回)において、上位者(★)の榮譽を称え、特筆すべきである、代表的な彼ら彼女らの氏名を記しておく。

まず、2021年度の上位3名は、戸所星南、安部幸実、松田瑠偉(全員、経営学部の時3年生)であった。また、2022年と2023年度の合計の上位2名は、倉本英亮(経営学部の現3年生)、田村圭(理工学部の現2年生)であった。

上記の学生は、「SDGs ポイント」のみならず、SDGsの取り組みで明星大学を引っ張って行ってくれた学生と言っても良い。また、「学業とは別の視点」で素晴らしい功績と言えよう。

なお、最後の学生は、「SDGs ポイント」の終了に伴い、
『日頃の活動や買い物からSDGsに視点を向けての生活は探してみると意外にも多く、視野がひとつ増えた面白さがありました。この培って身につけた視野と知識は将来に役立つかもしれない良い経験にもなりましたので感謝です。』

とのコメントを寄せてくれている。

3. 2023年度末で終了

3.1. これまでの成果の振り返り

2023年度までを前章までで振り返ってきた。

繰り返しておく、希望する学生がポイント収集を楽しみながら、SDGsの自発的な学習を行い、“SDGs分野を日本で一番理解した学生”になってもらう狙い、およびこれらの構想や経過を社会に情報発信し、出来るだけ訴求することにより、明星大学が“SDGs分野で日本のトップランナーの大学である”という認知を広め、日本社会から地球環境への貢献を目指してきた。

これらの壮大な目標（夢）に関して、初年度から大賞を受賞し、2年目、3年目も通常の実績のみならず、情報発信などを続けてきた。まだ完全な成果ではないかもしれないが、相応な成果は収めてきた。

3.2. 課題（業務負荷などの問題）による終了

これまで成果を出してきた一方で、責任教員である著者は、この取り組みへ注力できなくなりつつあることに嘆いた。特に、学部などの業務や授業数の増加により、学生によるSDGsの取り組みの投稿数を増やす施策に対して、これ以上尽力できなくなった。具体的にしておくと、2023年度は、学務の委員数は、就職委員長など9つを兼ねている。さらに、授業数は、2024年度は0.5増えて、結局7.0（前期後期で14コマ）になる。

これまで述べた通り、壮大な目標（夢）を描いて邁進してきた。しかしながら、“戦略的”と直接的に謳うものにだけにリソースを補充するスタンスになっているため、そもそもの業務で過負荷になると、そういった志があっても、“戦略的”なことに注力しづらくなる。このことは容易に想像できるはずだが、現実的にはそうではなかった。（ちなみに、著者の専門は“経営戦略”であるが、それを共有できないのが非常にもどかしい。）

また、大学外へのアピールや、学生のレベルを上げて、ある有力な顧問からも賞賛された、著者が所属する経営学部（斬新的な推進役）への一部の塩対応からも分かる通り、一部の教職員が変化を嫌っており、非常に残念である。しかしながら、客観的に見てそうなっている。これでは、ダーウィン（の進化論）の『最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるのでもない。唯一生き残ることが出来るのは、変化できる者である』や、坂本龍馬の『時勢に応じて自分を変革しろ』、および現代の潮流自体に逆行してしまっている。

他の視点に目を向けると、投稿者の固定化などにより、マンネリ化してきた。特に立上げ時の関係者も減り、2021年度と2022年度の初代の事務局2学生（西村、今井）の卒業に伴い、2代目の事務局2学生（永藺、高橋）も2023年度に加わったが、Instagram開設などの努力も空しく、投稿数の拡大には至らなかった。

なお、ここ2年は、高大連携を謳い、明星高校などへの展開も模索していたが、総論賛成だが、各論に入ると実現できなかった。大学なので当たり前だが、登録者が毎年卒業し、来年度も授業などで大学生を募集する必要があるが、著者や事務局の募集意欲が減退してきた。

さらに、取り組みは常に変化させていく必要があるが、そう簡単にはいかず、2年目以降の「賞」は取れなかった。

以上のような課題より、一定の成果はこれまでに得られたが、今後の新たな成果はより減少すると考えられ、2023 年度末（少し早めの 1 月末）で一旦終了する決断を下した。

4. まとめと謝辞

著者は、責任教員として、「SDGs ポイント」を企画し、これまで約 3 年間に渡って運営してきた。ありきたりだが、著者にとって、3 年間という年月は、長くもあり、短くも感じた。

この 3 年間に投稿し、明星大学を引っ張って行ってくれた学生は、“学業とは別の視点”で素晴らしい功績であり、大いに評価されて良いであろう。従って、これから就活の学生においては、そのガクチカ（学生時代に力をいれたこと）や自己 PR、SDGs 関連のビジネス分野を志望する場合はその志望動機として、立派にアピールしてもらいたい。

また、この「SDGs ポイント」の成果（実績）の全ては、投稿しないまでも、参加（登録）に手を挙げてくれた学生や、事務などで協力してくれた方々の全てのものでもある。特に、経営学部支援センターの久我めぐみ氏は、3 年間の上位者への景品贈呈などにおいて、嫌な顔一つせず、定形外の業務を快く全て遂行してくれた。

以上の方々、さらには何らかで少しでも関わってくれた、全ての方々に対して、大いなる謝意を表明し、この取り組みを終えたい。

「参考文献」

- [1] 安岡寛道『SDGs 経営の促進に向けたインセンティブの研究～明星大学「SDGs ポイント」に見る学生の取り組みに関する一考察～』明星大学経営学研究紀要、第 18 号 89-102 頁、2022 年 3 月 15 日。
- [2] 安岡寛道『「SDGs ポイント」における目的意識と危機意識の比較分析』国際戦略経営研究学会・2022 年次大会、2022 年 10 月 1 日。
- [3] 地方創生とデジタルビジネス研究会（安岡寛道、大森寛文、宇都正哲、鷹取功、原洋一、伊藤智久、谷口麻由子、田原洋樹、寺田知太、広瀬安彦、金森剛）『地方創生：デジタルで救う地域社会・経済』中央経済社、2023 年 5 月 2 日。
- [4] 経済産業省『SDGs 経営ガイド』2019 年 5 月 31 日。
- [5] 今井詩央里『企業が取り組む本質的な SDGs 経営』明星大学経営学部 2022 年度卒業研究（研究論文）、2023 年 1 月 11 日。